

# 金沢大学におけるビジネス日本語教育の実践報告

## ～ビジネス日本語講座パイロットケース受講生への調査から～

深川 美帆・島 弘子・太田 亨<sup>※1</sup>

### 要 旨

本稿は、金沢大学留学生センターが開講しているビジネス日本語講座の第1期（パイロットケース）についての実践と、受講生への調査から見てきた今後のビジネス日本語教育の方向性について報告するものである。本講座は金沢大学で行われていたアジア人財資金構想プロジェクトを基に、2011年4月より金沢大学の全学の留学生を対象とした講座として行われている。2011年4月から2012年8月までの第1期のパイロットケースで行った各回の授業アンケートおよび修了生への聞き取り調査の結果から、本講座のカリキュラムや授業内容について受講者はおおむね満足しており、特に就職活動の流れや大学卒業・修了後の自分のキャリアについて考えるといった、本講座の目的を達成できたことがわかった。これらの結果から、本学の学生の状況やニーズに適したカリキュラムや授業内容の方向性についても明らかにすることができた。

【キーワード】 ビジネス日本語教育，アジア人財，就職支援，グローバル人材

### I はじめに

本稿は、2007年度から2011年度にかけて行われたアジア人財資金構想プロジェクト（以後、「アジア人財」と略す）のノウハウを生かして開講した「ビジネス日本語講座」の第1期（パイロットケース）を終えての実践に関する報告である。特に受講生へのアンケートとインタビュー結果から、本講座での成果と、今後の方向性について述べる。

### II ビジネス日本語講座の概要

金沢大学のビジネス日本語講座開講は、アジア人財資金構想プロジェクトからの自立化を目指す方向で、2010年4月から企画・立案され、翌年度2011年に留学生センターによって運営されている総合日本語プログラムの中の1コース（パイロットケース）

として、開講した<sup>注2</sup>。

## 1. 目的

この講座の目的は、金沢大学に在籍する外国人留学生で日本企業または海外の日系企業への就職を目指している学生への就職活動に必要な基礎知識と支援（1年目前期と夏季集中講義、および後期）、就職後に必要な知識やスキル（2年目前期および夏季集中講義）とそれを支える日本語力を育成することである。

表1 2011-2012年度ビジネス日本語講座（第1期、パイロット版）カリキュラム

科目名	開講時期・曜日時限	主な内容
ビジネス日本語Ⅰ	2011年前期 毎週木曜	日本の経済・企業文化について、就職活動の流れ、採用試験について
ビジネス日本語Ⅱ	2011年前期 毎週火曜	基礎ビジネス日本語（敬語、メールの書き方）
ビジネス日本語Ⅲ	2011年夏季集中、8月	キャリアデザイン、業界研究
ビジネス日本語Ⅳ	2011年後期 毎週木曜	面接対策（自己分析、エントリーシートの書き方、模擬面接）
ビジネス日本語Ⅴ	2011年後期 毎週火曜	上級ビジネス日本語1（ディスカッション、新聞読解）
ビジネス日本語Ⅵ	2012年前期 毎週木曜	企業での働き方、日本社会について
ビジネス日本語Ⅶ	2012年前期 毎週火曜	上級ビジネス日本語2（入社後に役立つビジネスマナー、待遇表現、ディスカッション）
ビジネス日本語Ⅷ	2012年夏季集中、8月	ビジネス企画と発表（プロジェクトワーク）

## 2. 対象者

対象とする学生は、本学の全学類・研究科に所属する正規留学生（学類生および大学院生）で、特に学類3年生、修士1年を想定している。また、日本語力については、上級レベルの日本語力を有していることを条件としている。具体的には、日本語能力試験N2以上または金沢大学総合日本語プログラムの総合日本語Eレベル(上級前半)以上の学生を対象としている。

今回のビジネス日本語講座には、1年目前期に16名（文系学類生2名、文系大学院修士2名、理系大学院修士10名、理系大学院博士1名）、1年日後期に15名（文系学類生1名、文系大学院修士1名、理系大学院修士12名、理系大学院博士1名）、2年目前期に10名（文系大学院修士2名、理系大学院修士8名）、2年目夏季集中に4名の学生（理系大学院修士2年）が履修した<sup>注3</sup>。

## 3. カリキュラム

カリキュラムは1年半の8科目からなる。最初の1年間で、就職活動に役立つ知識とビジネス日本語を学び、次の半年間で入社後に役立つビジネス日本語と社会人とし

て必要な知識を身につける内容となっている。

#### 4. 教師

ビジネス日本語講座の授業は、留学生センターの専任教員2名と非常勤講師及び謝金講師（各学期2名および夏季集中2名）、そして元アジア人財プロジェクト・オフィサー（現 日中韓環境・エコプログラム、プロジェクト・オフィサー）1名で担当した。また、これ以外にも、講義の内容によっては外部（および学内の）専門家やアジア人財修了生に講義を依頼した。

#### 5. 授業の様子とアンケートの結果

今回のパイロット版カリキュラムの内容を実施後に検討するために、各授業において毎回授業修了後に授業での自己の振り返りと授業内容についてのアンケートを実施した。

以下、授業の種類別にその結果を考察する。

##### 1) ビジネス日本語 I（企業での働き方，日本社会について）

この科目では、入社後に必要なビジネス場面における基礎知識を身につけるために、ビジネス文書・メールの書き方の指導、日系企業事例研究、日本経済と企業の動向、メンタルヘルス、ワーク・ライフ・バランスなどを授業に組み込んだ。全11回授業を行い、学期開始時履修登録した学生10名が、実際に授業が始まると、出席した学生は2－4名になった。その理由としては、この時期はちょうど就職活動の追い込みの時期であり、4、5月は最終面接の時期と重なる学生も多く、また6、7月は5月までに内定が決まらなかった学生が再度応募や面接に挑む時期であったためである。しかしながら、参加した学生に、これらの各回の授業について「授業は役に立ったか」「授業はよく理解できたか」「授業に満足しているか」の3項目について5段階で評価してもらったところ、評価はいずれの項目も平均4点以上であり、参加すれば学生たちにとって意味のある内容であったといえる。

##### 2) ビジネス日本語 II（ビジネス日本語）

この科目では、入社後に役立つビジネス場面における特に日本語力の向上を目的として、ビジネスマナー、待遇表現、日本のビジネス場面をテーマとしたディスカッションを授業に組み込んだ。こちらの科目でも全11回授業を行い、学期開始時履修登録した学生10名が、敬語やビジネスマナーを取り上げた学期の前半は5－8名の出席が

あったが、上級レベルの読解やディスカッションを取り上げた学期後半になるにつれ、出席者は少なくなっていた。これらの各回の授業について「授業は役に立ったか」「授業は難しかったか、易しかったか」「授業に満足しているか」の3項目について5段階で評価してもらったところ、授業の難易度についてはばらつきがみられたが、「授業が役に立ったか」と「満足度」については平均4点以上であった。

### 3) 夏季集中

この科目では、チームによるプロジェクト型活動、企画・発表の練習を6日間（1日2コマ）で行った。履修した学生は4名と少なかったが、これらの学生はほぼ毎回出席し、最後のプロジェクト発表会でチームとしてプレゼンテーションを行った。講義最終日に参加した3名の学生らに書いてもらったコメントには、自分の力の伸びを感じた点として「チームワークの意識」や「プレゼンテーションの仕方」などが挙げられていた。履修者が少なかったことについては、開講時期が学生たちの学業・研究面でのスケジュールと合っていなかったことや、内定を得た学生の多くは修士論文や研究のほうに集中したいと考えていることなどが原因ではないかと思われる。

## III 修了生へのインタビュー

2012年8月でビジネス日本語講座第1期のコースが修了した。第1期は全ての科目を合わせて16名の履修者がいた。2012年9月の時点で、そのほぼ全員が日本企業への内定を得たと聞いている。この第1期に履修した学生7名（全員中国人留学生）を対象に、このビジネス日本語講座が彼らの就職活動においてどのような意味があったかを知り、今後のビジネス日本語講座の内容に活かすために個別にインタビューを行った。質問はおおむね以下の内容に沿って行われた。

- －就職活動で大変だったこと、困ったこと
- －自身の就職活動をどのように行ったか
- －就職活動についての後輩へのアドバイス
- －受講したビジネス日本語講座に対する意見
- －その他

インタビューの所要時間は1人30分から50分程度で、筆者ら（深川と島）が同時にまたはいずれか1名がインタビュアーとして質問を行った。インタビューに回答した学生については表2のとおりである。

表2 ビジネス日本語講座 第1期受講生 インタビュー回答者の内訳

	専攻・学年	日本語学習歴	就職先（業種）	ビジネス日本語受講歴
1	文系（人文）・修士2年	6年	小売業	IV, V, VI, VII
2	理系（電子）・修士2年	4年	メーカー	I～VIIまでほとんど出席
3	理系（電子）・修士2年	12年	シンクタンク	I～VIまでほとんど出席
4	理系（電子）・修士2年	3年	メーカー	I～V, VIII
5	文系（経済）・修士2年	6年	小売業	Iのみ
6	文系（法学）・修士2年	9年	メーカー	I, II, IV, V
7	理系（電子）・修士2年	10年	情報・通信業	I, II, IV, Vはほとんど出席, VI, VIIはたまに出席

## 1. インタビュー結果

### 1) 就職活動で大変だったこと

就職活動において大変だったことは人により違いは見られるが、複数の学生が挙げていることとしては、「志望する職種・企業を絞り込む過程」であった。なぜ母国ではなく日本の企業で働くのか、自分がどのような業界のどのような職種で働きたいか（業界・企業研究）や、自分にはどのような仕事が適しているか、自分がしたいことは何か（自己分析）については、ビジネス日本語 I, III および IV で数回にわたって取り上げ、授業で指導をしてきたが、実際に自分自身で就職活動を始め、書類をまとめたり面接を受けたりしていく段階で、何度も反芻する場面に遭遇したと述べていた。特に、最初に自分が希望した企業や職種での就職が決まらなかった場合には、もう一度自分自身を振り返り、自身の就職活動を立て直していった学生も少なくなかったようである。こうしたことから、この講座で扱った業界研究、自己分析といった内容は、学生が自分自身で就職活動を進めていく上で重要な位置を占めると言える。そのほかには、就職活動での地方（金沢）と首都圏間の移動の大変さ（経済面・時間面・体力面）を挙げる学生が多かった。これは、大企業などへの就職を希望する場合に地方大学で学ぶ学生にとってはやむを得ないことであるが、修了生たちは先輩や友人から情報を収集し、それぞれに工夫し、計画性を持って就職活動に臨んだことがわかった。

### 2) 自身の就職活動について

就職活動が当初の自分の志望どおりに順調に進んだ学生もいれば、何度か軌道修正をして内定を得た学生もあり、人によって異なる点があるのは当然のことであるが、学生の専門分野によっても違いが見られた。理系の場合は自分の大学院での専門分野が志望先の業界や職種に直結することが多く、順調に行けば大学での専門を活かした職種への内定が決まる。しかしながら、理系・文系を問わず、自分の専門知識と実際

にやりたい仕事での分野が異なっていたり、また自分の専門分野にこだわりすぎた場合には、企業側の意向とのミスマッチがあり、なかなか思ったとおりの職種や業界へ就職することが難しい場合もあることがわかった。また、今回の修了生は全員修士課程の学生であったということもあり、就職活動と自分の専門分野の研究をいかに両立させるかという点に苦労が多かったことがわかった。

### 3) 後輩へのアドバイス

自身の体験を踏まえての後輩への就職活動のアドバイスとしては、志望する業界や職種の決め方に関するものが多かった。また、文系と理系での事情の違いも彼らのコメントから窺い知ることができた。以下にその一部を挙げる。「将来何の仕事をしたいか、HPで興味を持った業務と合わせて説明できるように。」(理系)「業界・企業研究は大事である。自己分析と業界軸、自分軸が一本になれば、どんな質問をされても大丈夫。」(理系)「就職活動の前に必ず自己分析を。自分の強み、欠点を知ってから会社の就職活動をした方がいい。」(理系)「本当に自分が日本で就職する意欲が高いか、自分がやりたいことは何かをはっきりさせる。」「就職の情報の収集も大切。特に日本人の友達からも情報を得られるとよい。」「理系と文系で状況がだいぶ違う」「大学名よりも、本人。日本語力と考え方、コミュニケーション力、プラスアルファで専門性と資格。」(文系)「最初から企業や業界を絞りすぎない。専門の周辺部分への広げ方が必要かもしれない。」(文系)

これらは、ビジネス日本語講座を受講しはじめてから修了までの1年半で自分自身の専門やキャリアについて考え、行動し、自身で見出した彼らの答えであるともいえよう。

### 4) ビジネス日本語講座を受講しての感想・提言

複数の学生が挙げているのが、まず日本における就職活動の流れが理解でき、それをふまえて自身の就職活動に臨めたことである。自国での就職事情とはかなり状況が異なり、また日本人学生とはさまざまな面で事情が異なる留学生にとって、企業への就職へのプロセスがどのようになっており、どのようなことに留意しなければならないかといった情報を収集するのは、容易なことではない。このビジネス日本語講座では、就職活動が本格化する前のビジネス日本語講座Ⅰ(1年目前期)で就職活動の流れを理解し、どんな準備が必要かを知ることができる。こうした点において受講生からの評価は高かった。

次に、実際の就職活動に必要なエントリーシートや履歴書の書き方、個人面接やグ

ループディスカッションの練習も役に立ったと述べている学生が多かった。これらはビジネス日本語講座Ⅳ（1年目後期）において重点的に行った内容であるが<sup>5</sup>、授業で一通り体験し、複数の講師やクラスメイトからのフィードバックを受けたことが<sup>6</sup>、その後実際の就職活動に役立ったようである。

また、ビジネス日本語講座に参加したことで、同じ志を持つ留学生の仲間と知り合い、情報を共有したり励まし合ったりできたことも、受講生にとってはよかったようである。学生のコメントには「ビジネス日本語のクラスの中でいろいろな人と知り合い、交流や情報交換ができた」「ビジネス日本語講座の授業への負担は特にはない。（ビジネス日本語講座の）授業に出るとメンタルヘルスによい。結果的にそう感じた。」といったものがあった。

## 5) その他

ビジネス日本語講座を修了して、翌年春に企業へ入社するにあたり、何か不安なことなどがないかとたずねたところ、何人かの学生は、自分の日本語力のことや、日本人社員との人間関係の作り方について、よくわからないので不安であると答えた。このビジネス日本語講座が目指すところは、単に企業の内定を勝ち取るところで終わるのではなく、日本企業へ就職し、その後、その企業において一社会人として日本人とともに活躍できる人材を育成することにある。こうした点から見ると、入社後に日本語や日本社会の習慣などで戸惑うことのないよう、大学在学中に学生たちのこうした面での知識や力を高める必要があると思われる。

## IV 今後への課題

以上、ビジネス日本語講座の概要と実践からわかったことについて述べた。これらをまとめると、今後の課題としては以下のことが挙げられる。

### (1) カリキュラムのさらなる改善

この1年半のコースにおいて、何をどこまで、どの時期に教えるかを再度検討する必要がある。例えば、1年目後期の「ビジネス日本語Ⅴ」で行った「知的財産権」についての授業は、就職活動が目前にある学生たちにとってあまり必要性を認識してもらえなかった。こうした学生の様子、理解度を踏まえ、次年度以降へ向けてカリキュラムを再検討する必要がある。

(2) BTA<sup>注4</sup>関係；学内外の専門家，企業との一層の連携

ビジネス日本語で扱う内容は，日本語教育関係者のみで指導するには限界がある。この第1期においても，外部講師を迎えての授業を組み込んだ<sup>注5</sup>結果，日本語教師だけでは到底網羅しきれない分野や，現在の日本企業の姿を正確に捉え理解することができ，学生からの評判もよかった。今後もさらに学内および学外の専門家，企業との連携を深めていく必要がある。

(3) 学内BJ講師の養成

ビジネス日本語科目は，通常の日本語の授業とは，目標や内容，授業の進め方も大きく異なる。特に本稿で取り上げた第1期後半では，ビジネス場面で必要な日本語スキルの習得や，ビジネス場面を意識したディスカッションやプロジェクトワークであった。こうした授業を担当し学生が満足する，受講する価値のある授業だと評価されるレベルのものを提供するには，教師側にもビジネス分野の知識が必要であり，就職活動を念頭に置いた教育内容も工夫が必要である。ビジネス日本語講座をコースの1つに正式に位置付け，学生に授業を提供していくのであれば，学内でビジネス日本語科目を担当できる講師を今後本格的に養成していく必要がある。また，これと共に学内の就職支援室との連携も一層強めていき，どこまでを留学生センターの授業として提供すべきか，どこからが全学の学生に共通して必要な指導なのかといった点を見極めていく必要がある。

(4) 大学の留学生政策の中での位置付け

ビジネス日本語教育は，いわゆる日本語教育とは異なり，Japanese for specific purposeの一つであり，また学生のキャリア教育という側面を持つ。今後，金沢大学がどのような留学生を世に送り出し，社会にどのように貢献していくつもりなのか，大学としての学生への教育の方向性を明らかにした上で，それと合わせて今後のビジネス日本語教育の発展の方向を，コース運営の点からも，カリキュラムの点からも定めていく必要がある。

以上の点を踏まえ，今後も本学における留学生のためのビジネス日本語教育の形を確立していくつもりである。



**【謝辞】**

最後に、ビジネス日本語講座に協力して下さった学内および学外の講師の方々、およびアジア人財資金構想プログラムOB・OGの方々に心からの謝意を申し上げます。

**【注】**

- 1 深川美帆，太田亨（金沢大学国際機構留学生センター），島弘子（金沢大学大学院自然科学研究科日中韓 環境・エコプログラム プロジェクト・オフィサー）
- 2 アジア人財資金構想プログラムからの自立化についての詳細は深川・太田・島（2012）を参照されたい。
- 3 前期履修した学生のうち，文系学類生3名，文系大学院修士1名，理系大学院修士2名が後期の授業を履修しなかった。代わりに，後期から新たに理系大学院修士4名と文系大学院修士1名が加わった。
- 4 BTA とは，Business teaching assistant の略。
- 5 外部講師を招いての講義の一部は特別公開授業とし，ビジネス日本語講座の正規受講生以外でも興味のある学生が聴講できるようにした。

**【参考文献】**

1. 深川美帆・島弘子・太田亨（2012）「金沢大学におけるビジネス日本語教育の実践報告～アジア人財プロジェクト自立化後のパイロットケース～」『金沢大学留学生センター紀要』第15号，pp.77-90.

## **Japanese Business Language Education by Kanazawa University: Results of the first period**

Miho Fukagawa, Hiroko Shima and Akira Ota

### **Abstract**

This paper reports on the first semester offering of the course called “Japanese Business Language Education” at Kanazawa University. First, the background and details of the Program, which was designed based on the findings from the Advanced Education Program for Career Development for Foreign Students in Japan, are explained. Then, the outcome of the first year of this course, based on the results of the students’ questionnaires and interviews, is explained. From the questionnaire and interview results, it is concluded that the contents of the course generally satisfied the students and was valuable for both job hunting and thinking about their career after graduation from the university. Further research and refinement of this course will take place to ensure that it continues to fulfill the needs of students and society.